

◎アンケートの概要

【調査対象】 令和5年度～令和7年度まで、本園と交流を行った16園（回答は園の代表者）

内訳： 上越市内10園（公立保育園7・公立幼稚園1・私立こども園2）

上越市外3園（公立幼稚園1・公立こども園1・私立こども園1）

新潟県外3園（私立こども園1・国立大学附属幼稚園2）

【調査期間】 令和7年度7月～8月

【調査方法】 対象園へのGoogleフォームによる調査

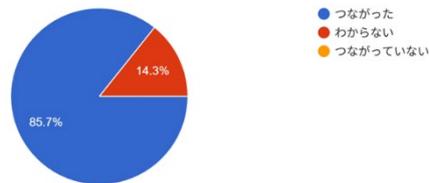
【調査内容】 本園の交流の取組「オープンカンファレンス」、「お出かけカンファレンス」、「交流だより」が、調査対象園で当たり前だと思われていたことの問い直しにつながったのか、交流するよさの実感につながったのか、また、そう考える理由について。

継続的に交流を行う意義や、本園に期待することについて。

◎アンケートの結果

※回答は、原文をそのまま掲載しています（園・学校名、個人の名前等は、「〇〇」と表記してあります）。

1 オープンカンファレンスは、自園で当たり前だと思われていることの問い直しにつながりましたか。



2 1でそのように思った理由を教えてください。

- ・他の方の当たり前が自分の当たり前にはなっていなかったため。
- ・保育者の意欲の向上が一番で、繰り返し見学での話が実践の中ででてきたこともあります。主体性保育について改めて考える機会となった。
- ・附属幼稚園さんの園庭の自然が豊かで、子どもたちの遊びも広がりやすい環境設定や先生方の関わり方を拝見し、子どもたちの主体性や感性がとても良く育っていらっしやると思いました。先生方が一緒になって遊びに没頭していることはもちろん、時に子どもたちからアイデアを引き出したり、子どもたちが自己決定できるような言葉かけや、裏で見守りサポートされたりしている姿がとても印象的でした。
- ・子どもの遊びに対する職員の見とり方や、その見とりを職員間で共有する方法が見つかった。
- ・自園の園児が附属幼稚園に遊びに行った経験を通して、これまでは天候や環境によって遊びが制限されることがあったが、訪問後は環境に合わせた遊びを工夫したり、自分なりのイメージをもって遊びを深めたりする姿がみられるようになったと感じました。
- ・保育では、互いに語り合うことがとても大切だと思っています。語り合うことで、互いの保育観にふれ、自分の実践を振り返ったり、他者の保育観(考え)を参考にして、また実践を考えていくことができるからです。その保育観の中には、自分の中の当たり前が覆されるような思いや考えが含まれていることも往々にしてあります。それを知ることができるのは、やはり、話をしてみたからであり、そうした話をする場であるオープンカンファレンスは当たり前の問い直しにつながっていると思います。
- ・保育者がどのような思いがあって保育をしているかや子どもの姿や育ちを共有できて、自分にはない発想等の気づきがあり、参考になった。
- ・これまでの自分の保育は子どもの主体的な部分をあまり大事にできていなかったところがあり、進め方の違いにヒントを得られる部分がたくさんあった。

- ・自園又は公立保育園での今まで自分の保育観とは、少し違う保育や環境を見て、自園でやってみたいということが沢山あった。
- ・2年前のことなので、カンファレンスの内容を覚えていない。
- ・先生方の言葉かけで、子どもたちのことを1人の人として尊重されていること。寄り添うことの大切さ。
- ・自分が迷っていたり、自信が持てなかったことに、よし、やってみよう！と一歩踏み出せることができました。
- ・子どもへの言葉掛けや視点。人的環境の大切さを実感。先生の言葉や雰囲気ひとつで、クラスが明るくなり子どもの気持ちが満たされ安心感につながる等の感想がありました。
- ・普段から保育中に自然に行っている職員の連携について、価値付ける意見をいただいた。あまり意識していなかったが、園内研修以外の場でも積極的に語り合っていることが、普段から何でも気軽に話し合える職員関係を築くことにつながっていると気づき、さらにチームでよりよい保育を行っていきたいと考えるきっかけになった。

3 オープンカンファレンスは、交流するよさを実感することにつながりましたか。



4 3でそのように思った理由を教えてください。

- ・自園の保育を振り返りながら他園の保育のお話を伺い参考にさせていただいている。
- ・いろんな園とつながりたい、対話したいという意識が生じている。今年は〇〇区の公立保育園に見学だけでなく、対話に意識を持って行くことができました。外部見学が見るだけでなく、対話になってきた。
- ・他園の様々な経験のある先生方と同じテーマでお話することで、私自身も当園の新人職員もそれぞれの立場で感じるがあった。
- ・自園の保育を充実させる（質を高めていく）ために園内研修や外部研修には取り組むものの、実際にゆっくりと時間を割いて「他園さんを見学する」ということをしてきませんでした。今回見学させていただき、また研究会にて私も勉強させていただく機会を頂き感謝いたします。
- ・子ども達の遊びが保育者の関わりによってどのように展開していくのかを、違った視点で見た意見を聞くことができた。
- ・他の園の保育者の遊びに対する思いを聞くことができて良かった。
- ・他園との語り合いの中で、自身の保育の振り返りにもつながるため。
- ・附属幼稚園や他園の先生方と話をし、新しい気づきがあった。
- ・日々保育をする中で、園によっての目標や環境は違うけれども、目指すべきこどもの姿や思いは同じであることがわかり、自園の保育をポジティブに考えられるようになりました。
- ・日ごろなかなか話をする機会のない方とも話ができるということは、多様な考えに触れることができるということでもあり、よいことだと感じました。多様な考えに触れることは、そこで自分の中に新たな視点が生まれることだと思います。保育を考えていく上では、日々自分の実践を振り返ることが必要で、そこには固定化された視点ではなく、子どもの姿を受けて、柔軟に角度を変えていけるような視点を持っていることが大切だと思います。そういった意味でも、オープンカンファレンスを通し、いろいろな方と交流することはとても良いことだと思います。
- ・いろいろな園での取り組みを知れて、保育者間の情報交換や意見交換ができ、ホッとできたり新鮮な思いを得られたりなど、心に響くものがあったと感じている。
- ・自園又は公立保育園の職員との関わりが主となる中、いろいろな園や立場の人達と話をすることで、今までにない刺激を受けた。
- ・クラス毎の少人数でのカンファレンスのため、参加者は自分の保育の悩みや困り感を伝えやすい雰囲気であった。
- ・参加された方の感想を聞くことで、自分とは違った視点にもふれることができたから。

- ・「自分の気持ちを本音で話し合う場」に参加できたことにより、保育を語るとは、子どもの姿を共有するとはを、肌で感じとれたと思う。そして、何より自分達もそう有りたいと思えたことが大きい。
- ・多様な園の状況をもとに語られる様々な実践例から、多くのことを学ぶことができた。自園のみで研究を進める中では得られない視点に触れることも、交流するよさを実感することにつながった。

5 お出かけカンファレンスは、自園で当たり前だと思われていることの間直しにつながりましたか。



6 5でそのように思った理由を教えてください。

- ・自園の保育を客観的に見てもらう機会は、普段当たり前で気が付かないことに気付くことができ、今ある特色を大事にしようという共有ができた。
- ・子どもが生活する場所や人的な環境が違って、子どもの声に耳を傾けながら遊びを広げていくことの大切さを皆で再確認できた。
- ・子どもの姿や遊びの様子を振り返る大切さをあらためて感じた。
- ・自分にはない見取り方を知ることができ、気づかなかった子どものことが知れて嬉しくなった。
- ・日々、自分自園の保育はこういうもの、という決めつけの繰り返しの中で、保育の場面を取り上げてもらい、その子や遊びの見方の視点が違うことを感じた。
- ・主体的保育に悩みを感じていた時期でしたがやってきた保育は間違いではなかったと自信を持つことができた。
- ・参加した職員が公開保育を見て、楽しかった!わくわくした!また参加したいと話していることや他園の方との意見交換での気付きもあったと感じたから。
- ・自分達が、普段の保育の中では見えなかった子どもの姿を知ることができた。この子はこうであると決めつけていた自分の保育に気づくことができた。
- ・実際に他園の保育を見ることで、普段気付かなかった自分たちの捉え方や考え方に気付くことができる。自分たちの保育を振り返るための多くのきっかけを得ることは、とても有効である。

7 お出かけカンファレンスは、交流するよさを実感することにつながりましたか。

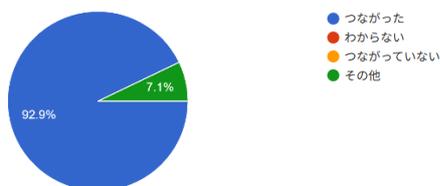


8 7でそのように思った理由を教えてください。

- ・附属の先生の見取りで自園の子どもの見取り方が変わった。
- ・私立園は、転勤もないため、意識的に外部交流をはからないとどうしても視野が狭くなってしまいますので、交流することで職員もまた頑張ろうというきっかけになりました。
- ・他の園の保育者から保育をしてもらったことで、違う角度から自分のクラスの園児を見ることができ、新たな発見があった。
- ・自園の職員ではなく他園の職員から保育を参観してもらうことだけでも、職員自身が保育を見直すきっかけになる。
- ・他の職員の視線で子どもの姿を伝えてもらう事であらたな発見につながる。
- ・子どもたちの様子を言葉で伝えるだけでなく、実際にみていただいたことで、附属幼稚園の先生の子どものみとりや眼差しへの理解が深まった。

- ・新鮮な角度からの視点で見てもらえて、園内だけでは見落としてしまう点も気づきがあり、内容にもよるが、やってきたことの自信にもつながりよかったと思う。また振り返り方を学ばせてもらい、後日園内でも真似させてもらうことで、よりチームでの保育に生きると感じ、良かった。
- ・普段いない第三者の方に保育を見てもらうことで、保育や子どものよかった部分を沢山取り上げてもらうことができた。
- ・たくさんの先生方のお話を聞くことができたたくさんの学びになった。自分では気がつくことができなかった子どもの姿や成長を知ることが出来た。
- ・職員同士の良さを改めて感じ合うことができる。
- ・何気ない関わり方を具体的な言葉で肯定的に解説してもらえること 意味付けしてもらえることが学びになる。
- ・普段わからない？これで良いのかな？などの迷いに対してのヒントになる時間になると感じる。
- ・客観的な目で見てもらえることは、自園の問題点や良いところが分かり、とても勉強になる。色々な視点や立場の方との交流、保育を共に考える時間はとても貴重で有り難い。
- ・実際に見せていただいた保育の場面をもとに、その園の先生方がどのような意図で環境構成や子どもへのかかわりを行っていたのか、直接聞くことができるのは、交流のよさであると感じている。また、他園の保育者と語り合う場だからこそ話せる悩み等もあるように思う。

9 交流だよりは、自園で当たり前だと思われていることの問い直しにつながりましたか。



10 9でそのように思った理由を教えてください。

- ・市外の園とのつながりがこのようにつくることができるとは思っていなかったため。
- ・自園では何ができるかを考えるきっかけになりました。具体的にできているわけではないですが、発信強化をするようになりました。
- ・短い参観時間の中で、当園の特色を理解していただけただけでなく、大学の先生も交えていただきながら、より考察を深めて交流だよりを作成いただいていることに、感銘を受けました。子どもの姿の背景にある心の動きや、教師の思い、関わり等、多面的に捉えて、よりよい育ちの為に適切なかかわり方を模索していくことは、私たち保育者の子ども理解を深めるためにとても大切なことだと改めて感じることができました。
- ・自園の職員とは違う視点から、保育活動を捉えてもらうことで、活動、こどものみとり方の幅がひろがった。そして「かかわり」という視点から伝えていただいたことで、「かかわり」とは、何をもって「かかわり」と捉えてきたのかという問い直しのきっかけとなった。
- ・子どもの遊びに対する保育者の関わり方や遊びを発見する見方が勉強になった。
- ・日頃の保育を言語化していただき、職員のかかわりが明確になった。
- ・附属幼稚園で行われている活動や子どもたちへの関わり方に触れることで、自園ではまだ取り入れていない考え方や実践を知ることができ、大変勉強になりました。
- ・異年齢のかかわりについての記載がありました。自分の中で考えていた異年齢のかかわりと、おたよりに書かれていた内容には違いがあり、当たり前の問い直しというよりは、保育に関する捉えや解釈の多様性に触れた感じがしました。
- ・文や写真で残っていることで、イメージしやすく心にも残りやすくてよかった。他の職員に知らせるに当たっても活用しやすい。保育の仕方に迷いを持つ職員は他にもいるので参考になる。
- ・保育を見てもらったあとで、カンファレンスもするのですが、交流だよりを通してより具体的に感じたことを伝えてもらったり、大学の教授のコメントも、とても刺激的で、保育の捉え方の参考になった。

- ・冊子に紹介しようと思う背景には、先生方が心打たれ、これを「問い直し」だと感じる部分が残されているように思う。
- ・客観的な視点で保育の思い感じ取ってくださり、具体的な言葉にさせていただけたことにとっても嬉しくなりました。大学の先生からのコメントも大変ありがたく参考になりました。〇〇小学校校長へも配布し共有しました。
- ・日常的に取り組んでいる「おしらせ」や「お尋ね」の時間にどのような意味がこめられているのか、そしてそれを支える教師のあり方とは、など改めて日々の保育を考える機会をいただきました。
- ・全職員での共有。振り返りをさせていただきました。

11 交流だよりは、交流するよさを実感することにつながりましたか。



12 11でそのように思った理由を教えてください。

- ・語りながら保育の楽しさを感じている様子があるので。
- ・他園のことを知る機会は少なく、知りたいことはハウツーだったりするのですが（これは否定しない）、先にも書きましたが、交流、対話が大事であることを再認識させられました。
- ・自園の教育理念や特色を生かす保育を実践しつつも、客観的にどう見えているのかを知る機会は今までありませんでした。交流だよりにて詳しく見取り、考察していただけて大変良かったです。ご多用の中取り組んでいただき本当にありがとうございました。
- ・「書き残す」「書き記す」ことで、交流した時の事実とそこからの学びが目に見える形で残される。そのことにより、自園や自分の変容、交流先の園の保育をふりかえり、他者に伝えることもできる。
- ・新しい視点で子どもたちの遊びを見とってもらうことができた。
- ・附属幼稚園だけでなく、他園の保育を知ることができました。
- ・自園の保育を観ていただいた場面を交流だよりに掲載していただく機会がありました。ひとつの場面でも多角的にみることで、子どもの理解を深め、よりの確な支援や環境づくりにつながると感じました。また、外からの視点を通すことで「こう捉えることも出来るんだ」といった新しい発見や学びを得ることが出来ました。
- ・オープンカンファレンス等と同様に、多様な考えに触れることができることがよさだと感じます。さらに、おたよりには、協議の場では聞くことのできなかつた内容（先生が少し時間を置いておたよりを書きながら、振り返られている「省察」の跡）も含まれているところに学ぶことが多くありました。
- ・上記にも述べたが、形に残ることととても参考になり、いろいろな角度の見取り方も感じられて学びが多く嬉しいものだった。
- ・交流だよりは園の全職員で目を通すことができ、同じ学びの場となる。（受け止め方は様々だが）
- ・様々な方の声に触れることができるので、直接私がお会いしたことのない方でも、同じように捉えたり、見ていた実践ではないけれど、自分の実践の捉えと重なったりすることがあったから。
- ・交流だよりを回覧し、全職員に読んでもらった。参観していただいた方を見取りと子供の様子等が分かりやすく書かれており、それぞれの職員が自分の保育を振り返ることになったと思う。
- ・ここまでの分析がなかなかできないので便りにしていただけふりかえりになりました。
- ・普段保育実践をしている中では、わたし自身は保育について考えているつもりでも、それを他の方はどうみるのか、どうみえるのか、わからないことも多いものです。昨年度、〇〇先生に公開研修会に参加いただき、丁寧な交流便りを作成していただいたことは、本当にありがたく、嬉しいものでした。普段、援助に迷っているA児の姿を丁寧におっていただき、その行動や振る舞いを意味づけてくださったことは、明日への保育の力をいただくものでした。自分の保育を「評価」ではなく、「多様な見方」の一つとして提示してくださる方の存在は、他園の先生方にとっ

ても大きいのではないかと思います。また交流便りとして形になることで、園内の先生の考えにも触れることができました。保育者と書き手の関係だけではなく、それを通して園内に交流を生むきっかけにもなるのではないかと思います。

- ・貴園での気づきや学びを発信していただく事は、更に自分達の学びに繋がります。

13 園と園で、長期にわたって継続的に交流を行うことについて、どう思いますか？

- ・公立保育園では小規模園同士の交流やペア園に出向き園見学を行っています。長期に渡っての交流は経験したことはないですが、公立保育園は職員の異動があるので新しい風を受けやすいので交流したいと思ったことはあまりないです。園児どうしの交流となれば、いろいろな経験ができ刺激を受け楽しそうですが、移動手段（園バス）がないため実現は難しい。
- ・継続的に交流・参加させていただくことで、一貫した学びを得られると感じています。
- ・日々の保育に悩んでも、公開保育やカンファレンスに参加することで、基本に戻ることができ「そうそう、大事にしたいことはこれだった」といつも思います。また、お越しいただいたことで園の現状も知っていただいたことも心強いです。また毎年いろいろな職員が参加することで、意識の統一をすることもできてると感じます。
- ・他との交流で新しい風が入る。いろんな考えややり方を混ぜながら保育を考えることは結果自園のためになる。
- ・職員も少なく忙しい中だが、保育者が楽しく保育を語ることができ安心感が持てるのであれば継続的に行うことは有意義だと思う。
- ・とても大事なことだと思います。できる範囲でできることを模索していくことが大事だと思います。
- ・園と園で継続的に交流することは、意義のあることだと思います。いい意味で比較することで、自園の良さも見えてくるため。
- ・お互いの保育を参観したり、また保育観の意見交換をしたりすることで、視野が広がるので交流することは良いことだと思います。長期にわたって継続的にという点については、1年(または2年)ごとに交流担当者を変える等工夫すると負担感なくできますでしょうか？
- ・それぞれの園が、実は意識に上っていない良さや知恵をもっていると思う。違う文化をもつ園と継続して交流することで、そこに気が付き、互いに生かすことができるのではないかな。
- ・園児と保育者の関わりの中で生まれる「つながり」が、より深く見えてくる。
- ・自園の保育だけでなく、他園の保育を知り、良いところを吸収できるので、とても良いと思います。
- ・一度では変わりきれない事や落とし込めない内容も回数を重ねていく事で全職員に浸透していく。
- ・いろいろなことが学べるのでいいと思います。
- ・園によって様々な制限があり難しいことだとは思いますが、お互いの学びを深めるための良い機会であると思います。
- ・継続的に交流するメリットは、教員同士の関係の深まりにより、より本音に近い話ができるようになることだと思います。デメリットは、保育観（思いや考え）を共有できてくるがゆえに、新たな視点が生まれにくくなってしまふところだと思います。個人的には、単発的な交流にはあまり意義を見出すことはできないので、継続的に交流していくことはよいと思います。しかし、デメリットで挙げたような状況にもなり兼ねないと考えられるので、チェンジエージェント的な役割を担うことができる存在がいるとよいと思います。（一つの考えにみんなが合わせていくような話し合いだとあまり学びにつながらないと思うので。）
- ・可能ならば良いと思う。公立は異動があるが、人が変わっても継続的にできれば力にはなると思う。
- ・附属幼稚園に限らず、他園と交流することは、第三者として保育を見たり見られたりすることで、自分の保育の振り返りになっていると思う。
- ・私は、園と園のつながりではないように思います。必要なのは個と個であり、その先に組織があるように思います。「この人に学びたい」「この人と一緒に仕事がしたい」という思いから始まるように思います。その先にその方が今所属されている組織があるので、組織と組織の繋がりと思うと途端に継続が難しくなるように感じています。
- ・個と個がつながる中で、互いの実践の意味が見出され、そこから共通の課題や問いが生まれ、だから次の研修課題や自分の実践の道筋が見えてくる、実践を豊かに捉え体現していくために「つながり」は必要なのではないかなと思

います。

- ・自分だけでは実現できないことが、それぞれの背景をもつその人と一緒だから形にできることがあると私は感じています。そうやってそれぞれの地でのそれぞれの実践がより面白くなっていく、そんな交わる場をつくっていくことが必要なのではないかと思うし、そんな役割を担っていきたいと思っています。（8の回答にも当たるかもしれませんが）
- ・お互いに意識を高め合いながら保育をしていくことができる。常に学び続けられる。
- ・園と園での交流の目的や内容が共有され、振り返りを一緒に行い、改善を図っていく体制を作ることが大切だと思う。持続可能でWin-Winの関係性になる仕組みを作ること、保育の質の向上を図っていけると思う。
- ・公立は職員の異動があるので、長期にわたって交流し振り返りを重ねることは資質向上に必要と感じます。
- ・交流において「継続」というテーマは、どの場面、どの校種においてもたびたび話題になることだと感じています。その中でも、貴園が実施されているカンファレンスの「継続」には、共感を覚えています。「継続」とは、単に回数を重ねることではないように思います。その都度の出会いや状況に応じて、カンファレンスのもち方も更新されているのではないかと想像しています。ここでは、私が捉える「継続」の意味について、二点述べさせていただきます。第一に、「語り合いが土台にあること」です。語り合いとは、保育の在り方を問い直していく営みにもつながるものだと考えています。ただ、その問い直しには相応の時間が必要です。語り合う際の構えや立場も一様ではありませんし、キャリアの段階や園の状況によっては、「まずは明日の保育をどうするか」が目の前の関心になることもあります。しかし、他園の実践や価値観に触れることで、自園を見つめ直すきっかけが生まれます。そして、「本当にそれが当たり前なのか」と問いを立てるようになる——そうした内的な動きは、一度の語り合いで起こるものではなく、様々な場で多様な人と語り合うことの積み重ねの中に育まれていくものだと思います。時間や空間を行き来しながら実践に向き合うなかで、保育を問い直す「瞬間」が生まれる。そのような出会いを支えているのが、貴園の継続的なカンファレンスなのではないかと考えます。第二に、「匿名性から脱すること」です。これまでの研修は、どうしても学び手に対する一方向的な教授の色合いが強く、顔の見えない関係性の中で行われてきた面もあったように思います。たとえば、公開保育研修会では多くの参加者が集まりながらも、「誰がそこにいるのか」がわからないというような、匿名性の強い場であることが少なくありませんでした。そうした中で、貴園のカンファレンスは、互いの顔や考え、価値観を知り合うことのできる関係をつくっているように感じます。他園を訪問する際には、園の方針や保育環境のみならず、そこで実践している人そのものを理解しようとするまなざしが生まれるように思います。相手の存在を理解するからこそ、実践の意味がより深く捉えることができる、そしてそれは、「継続」のなかでさらなる関係性の変化や深化につながっていくように思います。
- ・遊びの継続や変化、その後の子どもの姿等共有し、アドバイスをいただけると職員のモチベーションもあがり学びにも繋がると思います。
- ・子どもは交流先の園の友だちや先生、施設に対しても親しみをもつようになり、様々な人とのかかわりを嬉しいと感じる経験を積み重ねることができる。また、職員同士の関係性が構築され、より話しやすい雰囲気ができるため、互いの保育の質向上にもつながる良い取組であると考えます。

14 貴園が、地域における園と園のつながりをつくっていくとき、附属幼稚園に期待する役割や行ってほしい取組などはありますか？

- ・お出かけカンファレンスでは園の様子を見てもらい、プレゼンまでしていただき、普段見のがしてしまう子どもの姿をスライドを、見て解説してもらおうのでとても勉強になったという声が多く聞かれた。これを市内の幼稚園保育園全部受けたらいいのにと感じました。その中でお互いの保育の悩みや工夫、行事のアイデアなどを話し合えたらもっといいのにと感じる。
- ・カンファレンスに参加したとき、当園の悩みを聞いていただき、それをみんなで丁寧に真剣に考えてくださいました。小さな悩みも大きな悩みも「わかりますよ」と気持ちをくんでくださり、話してよかったと思い、次の日に意欲をもって取り組むことができました。
- ・附属幼稚園さんがとても身近に感じ、心と心の繋がりの場であるんだなあ、と感じました。当園もそういう場になれ

るといいなあ。

- ・パイプ役、基幹的役割。
- ・小学校教諭でもある先生方から幼児教育の大切さや、幼稚園の役割などを幅広く発信してほしい。架け橋のお手伝いもお願いしたい。
- ・一つのモデルとなってほしいです。真を伝えてほしいです。
- ・保育の質向上のための、研究や経験を生かした若手職員へのアドバイス等あったらありがたいです。
- ・私立園は良くも悪くも異動がないので、辞めないかぎり同じ職員で構成され、ある意味更新されません(市内に同法人の園がある場合は異動があるかもしれません)。私立園同士の交流もあまり機会がないので、幼保こども園の学びの場となるような機会をつくっていただけるとありがたいです。今回のオープンカンファレンスや意見交流会、講演会等。
- ・幼稚園、こども園、保育所、小学校など幼稚園に限らず、「こども」にかかわる教育施設ともつながれるハブになること。
- ・よくわからない。
- ・これまでと同様、公開保育の場を提供していただくとともに、交流の場を提供していただき、パイプ役となっていたきたいです。
- ・思いつきません、すみません。
- ・オープンカンファレンスのような附属幼稚園で他園の先生と交流しながら学べる機会はとても有難いです。
- ・私立の認定こども園として、他園との交流は難しいものがあり地区の研修会以外あまり交流は図れませんでした。具体的には難しいのですが、他園とつながる為のきっかけの園になっていただけたらと思います。
- ・幼小接続においても、交流の意義を感じ意識も高まってきていると思われるのに、実際はなかなか取り組みが進んでいません。行政の方などがコーディネーターとしてつないでくれることにより、取組が進んでいる例もあると聞くと、園と園のつながりづくりを考える時にも、コーディネーターの存在が必要だと思えます。これまでの実践から多くの知識や情報を持っておられる附属幼稚園の先生方には、ぜひコーディネーター的な役割を期待します。(軌道に乗るまで)
- ・附属幼稚園でのいろいろな取り組みや姿勢を学ばせてもらい、できそうなところはマネさせてもらいながら自分の園や保育を見直して行けたらと願う。個人的に思うのは、今されているようなことにもう少し参加しながら自分の力に変えたいところ。
- ・公立以外との関わりはなかなかできなかった部分もある中、上越市に根づいた上越教育大学からの発信であることは、信頼でき、安心して参加したり、関わり合うことができているので、とてもありがたい。
- ・ここでこの人たちが出会ったらもっと面白いことが起こるかもしれない。そんなことを考えて研修のグループは作ります。その仕掛けは意識できるといいなと個人的には思っています。
- ・保育士対象に研究結果の研修会などをおこなう。
- ・教育課題に係る先進的な実践研究を公開保育や指導資料等の開発等で教えてほしい。
- ・おでかけカンファレンス
- ・今回のように小学校職員にも参加していただきながら、ふりかえりをする、語り合うことで架け橋の役割、園と園のつながり、職員同士のつながりになりました。附属さんの知識、発信力、分析力などのお力は、これからも私たちの学びを支える存在だと思っています。
- ・今後も、県を超えて、ともに教育について考えていくことができたら嬉しいです。
- ・保育士のための、保育の振り返りの場。学びの場。一緒に考えていける場。垣根を越えたオープンで繋がる場。上越市の幼児教育の中心になってほしい。
- ・公開保育を見た参加者が気軽に語り合える機会を、年に複数回設けることで、地域における様々な園の保育者がつながるきっかけを多くつくることができると考えている。

給食の時間帯より

11時20分、園長先生がトレイの上に給食を載せて子どもたちに見せながら「おなかですいた人、どうぞ」と、それぞれの保育室をまわっていました。2・3歳クラスでは保育室で粘土遊びをしていましたが、11時25分頃からA児が手洗いをし給食用のテーブルに移動して、食事の準備を始めました。その数分後、B児が同じように食事の支度を始めた時、同じタイミングでC児が粘土の蓋を開きました。先生方も少し驚いていたようですが、C児がまだ粘土遊びをしていなかったことが分かったと、そのままC児が遊び始めることを見守っていました。先生は「温かいよ、できたてだから」「温かいの、いいよね」と声を掛けながら配膳を始め、A児とB児は食べる準備が整ったので、「お先に食べるね」とみんなに声を掛けて、二人は食べ始めました。食べている間も「いいにおいしてきた」「先生も食べようかな」等と先生方が声を掛けると、次第に他の子どもたちも粘土を片付けて食事の支度を始めたのですが、最後に遊び始めたC児だけはまだ粘土遊びを続けていました。11時50分までにはテーブルに座って食事を始めるとのことだったので、どのタイミングでC児が食事の支度を始めるのだろうと思っていると、11時45分過ぎ、担任の先生はC児がまだ粘土で遊んでいる姿を見て、小さなテーブルを用意しました。つくったものをそのまま置いておくためでした。「ごちそうさましたら、またやろうね」と声を掛けると、C児はすっと立ち上がって粘土を片付け、手を洗いに行きました。それぞれの子どもたちが、自分の中で折り合いをつけ、食事に向かい、11時50分過ぎには全員が食べ始めていました。4・5歳クラスは、保育室の隣にランチルームがあり、遊びが終わった子から順にイスを持ってランチルームに移動していたのですが、11時48分、3人の子が保育室にいて、積み木の片付けをしていました。先生は「三人でやったら、すぐに片付きそうだね」「Dちゃんは積木を集めてくれたね。ありがとう」と、穏やかに声を掛けていました。みんなで片付けを終え、すっきりとした気持ちでランチルームに向かっているように見えました。

子どもたちが朝食を摂る時間帯や、その日の空腹感はそれぞれ異なるため、その生活リズムにできるだけ合わせ、できるだけ食べたいという気持ちに寄り添うことを大切にしていました。空腹感があれば、おいしく楽しく食べられるし、苦手な物も口に運べるかもしれません。しかし、いつでもよいわけではなく、この時間までには用意をしようというルールを大切にしていました。決められた時間帯の中で、自分はどうすればよいのかを考え、自己決定する場となっています。子どもたちに対する言葉かけが大切なのだと感じました。これまで当たり前のように、決まった時間にみんなで一斉に食べ始めていたので、このような給食の進め方を参観させていただけたことはとても新鮮でした。時間の見通しをもって自己決定することは、きっと他の場面でも生かせると思います。今、自分のクラスでは、時計に貼った印を見て「もうすぐだ」と気付く子が何人かいるので、まずはこの気づきを大切にしたいと思います。子どもたちがこうしたい、という気持ちを受け止めながら、自己決定の場をつくっていききたいと思いました。

援助のタイミング

遊戯室では2・3歳クラスの子どもたちが電車ごっこ、バランスボール、跳び箱の一段目の部分を使ったジャンプなど、それぞれが好きな遊びを楽しんでいました。担任の先生は、子どもたちの遊びの様子やタイミングを見ながら、新聞紙を用意して、やぶったり丸めたりしました。それを見て、子どもたちは新聞紙を丸めて投げたり、頭からかぶったり、「焼き肉つくろう」とイメージを膨らませたりしていました。新聞紙でつくったボールで遊ぶE児がいました。E児は「見て!」と言って、うれしそうに何度も先生に向かってボールを投げ、先生から投げてもらったボールを取りに行きました。そこへ担任の先生は、新聞紙で四角い箱をつくり、E児にそっと渡しました。あっという間にボールを受け取るための的ができました。相手の先生が投げたボールを、E児が箱で受け取るのですが、新たな目標ができてさらに気持ちが高まったように見えました。先生の持つ箱に向かってF児がボールを投げるなど、交代をして何度も繰り返して遊んでいました。また、転がしたり回したりするなど、一人でも楽しめるフラフープですが、担任の先生がひもでしばり、いくつかつなげることで、長い電車に変身しました。先頭になりたい子、好きな色に入りたい子、エンジンが壊れたと言って直す子など、友達とのかかわりもできていました。子どもたちが走り回るようになると、床に線路をつなげ、電車が走る場所をつくっていました。また、紐でしばることを楽しみとしている子どもたちもいました。

子どもたちの遊びを読み取り、その楽しみがさらに広がるためには、何をいつ、どのように用意するのかをよく考えることが大切だと思いました。新聞紙が1枚あるだけで、紐が1本あるだけで子どもたちの目が輝いていました。タイミングをみて自分の保育の中にも取り入れてみたいと思います。

子どもたちの気持ちを大切に

テラスでは、4・5歳クラスの子どもたちがバケツやペットボトルを使って、泥水を移し替えて遊んでいました。「貸して」「いいよ」「これ、使ってもいいよ」など、四人の子が自分の目の前の遊びに夢中になっているだけでなく、友達の遊んでいる様子も見ながら、互いに声を掛け、かかわり合って遊んでいました。テーブルの上に置いてあったテープカッターが濡れてしまい「テープが汚れてるよ」とF児が言いました。先生は「どうしよう、じゃあ部屋に入れていいかな?」子どもたちに聞くと「うん、いいよ」との返事がありました。続けて「お部屋に持っていってくれる人いる?」と尋ねましたが、子どもたちはままごとに夢中で、持っていこうとする人はいませんでした。先生はその様子を見て「今日はみんなおいしいものつくっているから先生行くね」と言って、テープカッターを片付けに行きました。子どもたちは自分たちの遊びを夢中になって続けていました。

2・3歳クラスの給食の時間、粘土遊びを終えた子どもたちが、自分の使った粘土や粘土板を片付け、次々に食事の準備を始めていました。F児も粘土遊びを終えたので、手洗いをしたかばんを持って給食用のテーブルに移動しているところでした。しかし、粘土板を片付けていないことに担任の先生が気づき、F児に声を掛けました。しかし、F児は給食を食べようという気持ちに切り替わったところだったようで、粘土板を片付けることに難色を示しました。担任の先生はF児に対して「今度からは、手を洗う前に粘土板を片付けようね」と、給食の支度の前に何をするかをF児と話しながら確認をして、そっと片付けました。

使ったものを、また次にすぐ使えるように自分で片付けることは大切なことだと思います。しかしこの場では、それぞれがままごとに夢中になっていた4・5歳の子どもたちの姿、給食の支度に向けて気持ちが切り替わったF児の姿を大切にしたいと考えたのだろうと捉えました。ただ片付けるだけではなく「みんながおいしいものつくっているから」「今度からはこうしよう」と、子どもたちへの思いや願いを伝えること、これが「寄り添う」ということなのだと思います。「こうしなくてはいけない、いつも通りだから」だけではなく、その時の子どもたちの思いに寄り添い、育ちを願いながら援助したいと思いました。

M園の参観を受けて、本園の保育を捉え直す

保育室の時計に鳥の絵の印を付け、給食の片付けやおかわりをする時刻を知らせるようにしています。子どもたちは、その印を見て行動するようになっていますが、食事にかかる時間はそれぞれ異なります。早く片付けた子は絵本コーナーで待ち、その後全員で歯磨きをするのですが、遅くに終わった子が「僕も本が読みたい」という思いをもち、スムーズに歯磨きを始められないことがありました。そこで、鳥の絵のしるしの他にりんごの絵の印を時計に付け、歯磨きをする時刻を知らせるようにしました。また、遊びの時間に「もう片付け?」「まだ遊んでもいいの?」と担任に尋ねる子どもたちがいました。そこで、保育室の時計に片付けの時刻を知らせるためのりんごの印を付けるようにしました。まだ始めたばかりですが「もうすぐだよ」「あ!りんごになってるよ」と、子どもたち同士で声をかけ合う姿も見られるので、子どもたちの様子を見ながら続けてみたいと思います。

〔上越教育大学 高田俊輔先生のコメント〕

今回の交流だよりを読ませていただき、保育者が乳幼児の自己決定を支援することの重要性と難しさについて改めて考えさせられました。小学校のように時限で区切られる学校的な時間感覚と、乳幼児の主体的な遊びや活動を中心に形作られる保育現場での時間感覚は大きく異なります。そのため、保育者が乳幼児の「いま・ここ」で経験する時間を尊重することと、次の活動に気持ちを切り替えることへの支援を両立することは困難を感じることも多いのではないのでしょうか。一方で、交流だよりに記されたM保育園の先生方は、子どもたちが夢中になる時間を尊重し、たとえば小さなテーブルを用意するなど、彼ら自身が自己決定できるように環境を調整されていた点が印象的でした。子どもたちにとって、保育者による支援のもとに、どんなに些細なことでも自己決定する経験を積み重ねることは、その後の人生を主体的に生きていく上で大切ですね。

7月1日 <異年齢保育の時間帯より>

朝登園すると3歳児から5歳児の異年齢で構成されたグループが各保育室に集まってくる。朝の準備を終えた子どもたちは、保育室に用意されている切り絵や都道府県地図、塗り絵、ストローつなぎ等のお仕事（遊び）の中から1つを選び、黙々と集中して取り組んでいた。席は決まっておらず、自分で好きな場所を選んで活動しているようだった。たくさんのお仕事の中からA児（おそらく3歳児）は、細長く切られた色の違う画用紙を2枚用意した。椅子に座ったが、作り方が分からず困っている様子であった。そこに、B児（おそらく5歳児）が「どうしたの。何が作りたいの？」と優しく声をかけ隣の席に座った。A児は、「ばねが作りたい」気持ちを先生と一緒に伝えた。B児は、細長い2枚の画用紙を重ね、2・3回お手本を見せた。A児は、作り方が分かり画用紙に手をのびし折りはじめた。その様子をB児は、「次は青。次はピンク。」と折る色を伝えたり、折り方がちがうとそっと手を差し伸べ、折り方を直したりしていた。そこには、多くの会話はなかったが、年上の園児が年下の園児に教えたり、温かく見守ったりしている様子がとても微笑ましく感じられた。B児は、今までに助けてもらったという経験があったことから、A児に対して優しく接することができたのだろうと読み取った。また、A児は、優しく接してもらった経験から、困っている友達を見かけたときに自然と助けたいという気持ちにつながっていくのではないかなと思った。たてわり保育の環境の中で、異年齢児との自然なかかわりが生まれ思いやりの心が育っていくのではないかなと思った。

朝、登園してからクラス活動までおよそ1時間。園児たちは、保育室の中でお仕事をしていた。それだけの長い時間を過ごすことができるように、環境構成がされていた。同じ細長い画用紙でも、2枚でばね作り、3枚で三つ編み、三つ編みした画用紙をバックの紐にするなど園児の発達段階に合わせた環境構成作りが保育室の一か所に集約されていた。異年齢児が使える同じ材料がいつもあることで、遊びが発展し、友達の遊びを見て、「次は自分もやってみよう」と思い、園児同士のかかわり合いが生まれ、遊びがつながり、充実していくのではないかなと感じた。自分の保育をふりかえり、保育室やテラスなどの環境構成を考えて、あそびをつなげたいかなような仕掛けや声かけをしていきたいと感じた。また、環境構成をするためには、園児の遊びの様子を細かく見取っていく必要もあると感じた。

<給食の時間帯より>

給食は、たてわりクラス（異年齢）で行われていた。3歳児は、手を洗ったら自分のコップにお茶を入れ、席に座っていた。4・5歳児は、自分の給食を配膳していた。自分が食べる量ができる量を調整して器によそっていた。担当の先生に話を聞くと、野菜を苦手としている子もいるが、自分でとった分を残す子はいないと話されていた。園児が給食を配膳することで、食べる量を自己決定し、その量を責任もって食べることに繋がっているのではないかなと思った。今、自分のクラスでは苦手としている食材の量を担任が調節して配膳している。子どもたちにとったら、量を少なくしていたとしても、「先生が配膳したから」という思いがあって、野菜を残すことが多いのではないかなと振り返った。子どもたちに最低限の量を示しながらも、どっちの量がよいか聞いたり、自分で配膳をしてみたりするなど、子どもたちが「給食を食べる量の自己決定の場」を設定してみたいと考えた。

<P園の参観を受けて、自園の保育を捉え直す>

P園を参観させていただき、年長児Bが年少児Aに「何が作りたいの？」「次は青。次はピンク。」と作り方を優しく教えている姿がほほ笑ましく感じ、異年齢児とのかかわりについて考えるようになった。

自園で保育をする中で、年中の保育室を通りかかった年長児C児が、年中児D児に「石けんの泡をどうしたいの？」「何を作りたいの？」と声をかけてきたことがあった。声をかけてきた年長児Cは、どこか自信に満ち溢れ、その時は「困っていたら私を頼ってね。」と言わんばかりの表情の表情をしていた。年長児Cは、「泡をいっぱいにするには、石けんをたくさん入れるといいよ」、シャボン玉ができない時には、「どうしたらいいのかな。」と共感していた。その後のあそびの中で、年中児D児は「たくさんのができたでしょ。Cさんに教えてもらったから分かるんだ。」と嬉しそうに話していた。

異年齢児でかかわり合うことで、年中児は、教えてもらった喜び、年長さんへの憧れが生まれ、1年後の自分の目標になっていき、年長児はさらに自信がついていくのではないかなと捉え直した。そして、子どもたちの力によって園の文化が伝承されていくのではないかなとも考えた。担任の支援は、すぐに答えが出る声かけではなく、子どもたちが思考したり、気付いたり、かかわりが生まれるような声かけをしていく大切さを強く感じた。

【上越教育大学 吉澤千夏先生からのコメント】

自然な遊び場面での異年齢児同士のかかわりに出会えたようですね。登園してから1時間、子どもたちがじっくりと遊びに取り組んでいる姿の背景に、環境構成があることを感じられたのでしょうか。子どもたちが「やりたい」「遊びたい」と思ったときに、必要なものや人がちゃんとそこに「ある・いる」ことが、製作から気持ちを逸らさずに、安心して遊び込むことにもつながっているのだと思います。でもそれだけで、本当に子どもたちは遊びに長時間没頭し、互いにかかわりあいながら遊び込むことができるのでしょうか。素材を手にしながらも作り始められなかったA児とそのA児に話しかけたB児、二人の様子を見守りながら、A児が「ばねが作りたい」というときにそれを支えたであろう先生。こういった3者の姿はなぜそこにあったのでしょうか。A児とB児、そして先生は互いにとって環境であることは間違いありません。しかし、それは環境構成という言葉では説明しきれない、保育のダイナミズムとでもいうべきものだと思います。先生はA児の様子をどう見ていたのか、A児が画用紙を手にした時、どんなことを思い、考えていたのか、B児はどうしてA児に声をかけることができたのか、そしてそれはB児のどんな気持ちの表れなのか。そんなことに思いを巡らせてみるのも、保育を考える上では非常に重要なことのように思われます。これは、自園でのC児、D児のやりとりの解釈にも同様のことが言えます。また、給食場面での4・5歳児の姿に「自己決定」の重要性を見出し、自園での取り組みに生かしたいと考えられたようですが、子どもが何かを選び取っていく場は様々あり、どこか一定の場においてのみ実現するものではなく、また育つものではないように思います。P園の子どもたちが自分で配膳し、それを食べきることは、給食場面だけではなく、他のいろいろな場面での「自己決定」の育ちがあるのではないかな？と想像できます。そして、自ら配膳することは、自己決定だけではなく、多様な力の育ちを支えているようにも感じられます。今後も参観させていただく中で、多くの発見、そしてそれに基づく議論ができるといいですね。

6月3日 Q園を参観して①

4歳クラスを参観していたとき、二人の女の子（A児とB児）がペットボトルを使って製作をしていた。A児はペットボトルの飲み口の部分に、紫色のボールを付けていた。多様な角度からテープを貼っていた。しかし、時間をかけて貼っていたテープを急に剥がし始め、紫色のボールを外してしまった。A児は小声で「中がなあ…」とつぶやいていた。A児がふとB児の方に目をやると、B児がペットボトルの中に青いストローを1本挿していた。それを見て、A児は「ねえ、ストローってどこにあるの？」とB児に聞いた。B児は、引き出しを指さして、「ここ」とA児に教えた。この後、A児は自分が持てるだけのストローを片手で握りしめ、製作をしているテーブルに戻った。そして、1本ずつストローをペットボトルに挿し始めた。4・5本挿した後、再び紫色のボールを飲み口に付けた。その時の表情はどこか楽しそうであった。A児は、さらにペットボトルの側面にストローを付けて、「何か」を完成させていた。参観している私は、どんなイメージで何をつくらうとしていたのか、この時は全く分からなかった。

担任の先生が保育室に来た。A児は担任の先生に自分のつくったものを見せに行った。担任の先生は「何ができたの？」と聞くと、A児は「オットセイ！」と話していた。確かにオットセイであった。丸いボールは頭、側面のストローは手、ペットボトルは胴体であった。A児が「中がなあ…」と言っていたのは、オットセイの体の中が空洞になってしまうことを気にしていたからではないかと読み取った。オットセイだと分かった時、私自身の心は揺り動かされた。同じように、担任の先生も「わあ、すごいね！」と心を動かしていたことが確かに伝わってきた。

後で担任の先生と少しだけお話を時間をいただき、A児がつくっているものがオットセイだったと分かった時の感動を共有した。担任の先生は、「最初、ストローの使いすぎが気になって…」ということをお話して下さった。私も同じように感じた。子どもたちの自由な発想を大切にしたいという思いはあるのだが、一人でストローを使いすぎてしまったら、他の子が遊びで使いたい時に使えなくなってしまう。しかし、担任の先生は、A児の発想を大いに認めながらも、ストローが棚の中に入らないことをそれとなくつぶやき、周りにいた子どもたちと一緒にみんながストローを使えるようにすることの大切さに気付けるようにしていた。自由な発想を支えるのか、それとも、みんなのものをどう使うのかに気付く公共心を支えるのか、私自身も保育の中で同じような場面があり、いつも迷っている。担任の先生は、A児への願いをもち、今のA児にはこの言葉がベストだと判断し、このような援助をしたのだと考える。日頃からA児のことを大切に思い、よく「みて」いるからこそこの援助、とても素敵だなと感じた。

6月6日 Q園の参観を受けて、本園の保育を捉え直す

Q園の参観を通して、援助に迷った時どうするかということをもう一度思考してみた。前に、研究協力園との交流の中で、「一人一人にどんな願いをもっているか」ということを話題に語り合ったことを思い出した。援助に迷った時には、今この子にどう育てほしいのかを今一度思考してから援助しようと思いを新たにしたい。

先週、L児が友達と一緒に雨どい遊びをしていた。私は普段、見守る姿勢を大切に、子どもたちを見守り、子どもたち同士のかかわりの中で雨どいがつながるように支えているが、L児は、うまくいかなくなるとその遊びをやめてしまうことが多い。L児には、遊びの中で「できた」という自信をもってほしいと願っていた。そのため、いつもよりも少し多めに言葉がけをして、L児を支えてみようと思った。「あそこがうまくいかないね。こんなの（高さを調節するための木切れ）あるけど使う？」「ここはどうでしょうか？」などと、これまでの自分ではないくらい声をかけた。L児は雨どいの水路を完成させ、「今日は僕が組み立てたんだよ！」と自信をもって友達に紹介している姿が見られた。そして、片付けの時間まで夢中になって雨どい遊びを続けていた。後から振り返っても、少し援助しすぎたなど後悔はあった。しかし、今のL児には必要だったかもしれないと思うと、これでよかったかなという思いにもなった。正解は分からないが、Q園の参観で大切なことを問い直し、保育の幅が広がったような気がして、嬉しい気持ちになった。

6月3日 Q園を参観して②

年長クラスを参観していたとき、ダンゴムシを手に乗せ、じっくりとみているC児の姿が目にとまった。C児は、自分の腕を持ち上げたり、角度を変えたりして、ダンゴムシがどう動くのかを不思議そうにみていた。そのうちにC児は、ダンゴムシが自分の手から、歩いて箱の中に入るように、自分の手と箱を近づけながら、何度も試みていた。その様子をD児は、横からじっとみていた。この二人は近くにいたのだが、言葉を交わすことはなかった。しかし、D児はC児がやりたいことをよく理解しているようであった。ダンゴムシが手を伝って箱の中に入りそうになると、まるで「頑張れ」と声をかけているかのように体を動かしていた。しばらく二人は一緒にダンゴムシをみていたが、次の瞬間、ダンゴムシがC児の手を伝って、箱の中に入ったのである。その時、二人は目を見合わせて笑っていた。

言葉は一言も交わしていない。しかし「ダンゴムシを箱の中に導く」という目的を共有し、二人でその目的が達成されたときの感動を共有している姿を見て、言葉を交わす以上の「かかわり」であるのではないかと感じた。素敵なかかわりが本当に微笑ましかった。

【上越教育大学 山口美和先生からのコメント】

子どもの主体性を大切にしたいと考えるとき、保育者は何をどこまで援助すればよいかということが、日々の保育における迷いや悩みの種になります。「援助」の方法には、直接的に手を出して子どもを助けること、子どもに「こうすればいいよ」と方法を教えること、子どもにヒントを与えること、子どもと一緒に考えること…など多様なバリエーションがありえますが、保育者は、その子が今もっているスキルや力量と、こんな経験をしてほしいという保育者のねがいの両方を念頭において、瞬時に適切な援助の方法を考え、実践しなければなりません。子どもが今までやったことのない新しいことや、いまの自分の力量では少し難しいと思われることにも果敢に挑戦しようとする意欲をもつためには、保育者の「ちょっとした後押し」が必要ですが、「ちょっとした」の加減は、子ども一人ひとりによって異なります。一人ひとりが必要とするちょうどいい加減の援助を見極めなければならないところに保育の難しさがあり、また面白さや手ごたえもあるのだと思います。行った援助が「正解」であったかどうかはすぐに見えるものではありませんが、大切なのは、保育者がその子どものために心を砕き、子どもとの間合いを測りながら適切な援助のあり方を模索し、同僚と共有してよりよい援助を探ろうとする姿勢ではないかと感じます。

Q園において、A児がイメージする「オットセイ」を表現するために、友だちの作品をヒントにストローを使おうとしたプロセスは、表現に対するA児なりのこだわりと試行錯誤が見えて興味深く感じました。ただ、素材を好きなだけ使えるようにしておくことで試行錯誤が可能になる反面、有限な素材をみんなで分かち合う大切さをどう伝えるかという葛藤も生じます。子どもが素材を使うときに、保育者が「それ何に使うの？」「どうしたいの？」と尋ねることで、子どものイメージを表現する別の手段が見つかるかもしれません。子どもの発想を制限するのではなく、いろいろな方法を一緒に考えることで、より豊かで広がりのある表現を支えられるような言葉をかけられたらいいなと思いました。